

1 『扶氏診断』訳者への疑問

——島村鼎甫の可能性——

津下健哉

杉本つとむ氏著『江戸蘭方医からのメッセージ』は主として扶氏医戒につき解説した書物であるが、その最後の頁にその診断の項を訳した『扶氏診断』山本致美訳（安政五年刊）は実は山本氏の訳でなく、島村なる人が訳したものを山本氏が買い取り刊行したものと、志賀勉氏の好意により知ったとの記録を目にした。

早速その根拠を知るべく志賀氏、また宇和島の清水美氏の御好意により医譚（第七号、昭和十五年十二月）に志賀勇著『扶氏漢譯医戒と布清恭』なる論文のあることを知った。内容は布清恭（のち志賀天民と改名、志賀氏の御先祖）が漢訳した医戒の紹介と、彼が「訳したフーヘラン

ドの診断の項を上木すべく藩に許可を申し出たが（安政二年）、安政三年八月藩命によつて長崎留学中の友人村田藏六から島村という人が同一のものを訳し、それを大洲の山本有中が買い取つて上木したといふ事を報らして来たので、遂に出版を見合わせた」ことが記載されており、これは当時宇和島市伊達図書館館長であつた兵頭賢一氏から知らされたとのことである。

今宇和島藩の日記である藍山公記の安政二年九月二二日の項に布清恭がプロイセン国の人フーヘランド著述を訳してこれを上木するに当たり江戸天文台に照会ありたき旨の願出の記載があり、安政三年正月十二日の項にもこれに関する記載があるが、安政三年八月の藩命により中止になるとの記載は見当たらない。山口の内田伸氏より借用した昭和十九年刊の編者丹清氏になる『大村益次郎』にも、また昭和十年刊兵頭賢一氏著『愛媛県先哲偉人叢書伊達宗城』にもほぼ同様の記録があるが、これらは共に志賀泰山博士（志賀天民次男）談となっている。ただ山口市歴史民族資料館の大村益次郎文書の中に布清恭から村田藏六宛の安政三年霜月五日の手紙があり、これ

に「上木の儀も山本氏より願相済候趣に付草稿願書等乞下げの處伺出候に付定めて此頃は先生えも何等御沙汰御座候哉と奉存候」との言葉があり、山本氏の上木が決定、自分のものは取下げざるを得ない無念さが滲みでてゐる。そしてこの間に村田蔵六の関与が知られる。

では文中に出る島村某なる人物は果して誰か。私には若き日の島村鼎甫であつたと思われて仕方がないのである。しかも彼の出生地である岡山県の上道郡誌の彼の項には適塾入門の頃の記録として「鼎甫志しを励まし精を専らにし、夙夜研究し、学級毎に次を越ゆ。居る僅か一年にして全科を卒業す。同学の諸生皆舌を巻いて畏服し、名声漸く四方に馳す。江戸に遊ばんとして、益々その術を研磨し、曾て訳述せる『診則稿本』を売り金若干を得、遂に東行し伊東玄朴に就いて学ぶ」とあり、ここに『診則稿本』が即ち『扶氏診断』の原稿の総て、またはその一部であつたと想像する者である。なお当時の洋学者門人表に島村姓の者を探したが、日習堂に一名その名を見るが、年代的にみて無理がある。

この事は鼎甫としては何も発言せず、また山本側とし

ても何も触れないのは当然であるが、折角翻訳を完成されながら発刊出来なかつた布清恭の無念さは容易に想像され、それは言葉には出さないまでも家族内では繰り返し話されたであろうし、それが談の形で発表されたのではあるまいか。なお山本致美(有中、節庵)は大洲藩医、文政二年生、伊東玄朴の門人で豪放磊落、護身用ピストルを保持するなど奇行も多かつたと記載されている。

さて鼎甫と山本の間で村田蔵六がどう関与したかは明らかでない。年齢的には蔵六が五歳年上であり、適塾在塾期間にも多少のずれがあり、二人が共に机を並べた期間は無。しかし鼎甫がフーヘランドの書物を手にする機会があつたであろう。彼が阿波侯侍医として『撒兵演式』を発刊するのは安政四年であり、『扶氏診断』の発刊は安政五年である。

(広島県立身体障害者リハビリテーションセンター)